琉球大学学術リポジトリ

教員養成課程の検証報告：授業「教職指導」と「学校教育実践研究Ⅰ」を通して

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学院教育学研究科
	公開日: 2021-04-16
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 城間, 盛市, 下地, 敏洋, Shiroma, Seiichi, Shimoji, Toshihiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48198

【実践報告】

教員養成課程の検証報告

―授業「教職指導」と「学校教育実践研究Ⅰ」を通して―

城間　盛市[1]・下地　敏洋[2]

Practical Report on Teacher Training Course: Class Subjects "Teaching Guidance Class" and "Practical Research for School Education Ⅰ"

SHIROMA Seiichi[1], SHIMOJI Toshihiro[2]

要　約

琉球大学では，2007年度入学生から新たなカリキュラムで教員養成が図られた。また，教育職員免許法および同法施行規則改正（2019年４月１日）の施行に伴い，履修内容を充実した教職課程が開始された。本稿の目的は，2007年の導入から2019年の新教職課程導入までの13年間に，大学の教員養成が当初の意図した計画通り実施されたのか，また学生の質が十分保障されたのか，について検証することである。

「教職指導」は，教師の適性，教師の役割や使命感，悩み，実際の現場の観察など多様な内容を網羅した講義内容で，学生自身が教職に対する意識が大きく変化したことが把握でき，教職に真剣に向き合う姿勢が成就されているように考えられる。特に，学校現場での一日体験は，受講生からの評価も高いものがある。

「学校教育実践研究I」は，学習指導案の作成，模擬授業，模擬授業後の授業研究会が主な内容であり，授業評価アンケートで「模擬授業を全員に課したことは良かった」は4.48（最高は5.00），「教育実習における授業実践につながる内容であった」4.72，「授業全体を通して，意欲的に取り組める授業内容であった」4.61で，総合的にも高い評価を得たことが考えられる。

従って，１年次で実施する「教職指導」と３年次「学校教育実践研究Ⅰ」は，４年次の「学校教育実践研究Ⅱ」に繋がる重要な位置づけと捉えることができる。今後，資質の高い教員養成の取り組みが求められている「学校教育実践研究Ⅱ」の授業及び授業後の授業評価アンケートを考察することで，本来の目的を達成する授業構築になっているか検証したい。

キーワード：教職指導，学校教育実践研究I，職場体験，模擬授業，教員養成

１．はじめに

わが国は，戦前，師範学校を中心とした閉鎖的な教員養成制度によって，学校教育制度が形成されていた。戦後教育は過去の反省を踏まえて，教育改革がスタートした。高等教育においても様々な変革があり，その一つとして開放制の教員養成制度が確立され教育学部以外でも容易に教員免許状を取得することが可能になった。そのことは多様な人材が教育現場で活躍する利点も生まれた一方で，「教員でもなるか」といった「でもしか先生」なる言葉を生み，教員の質が問題になった。

現在，教員養成，教員採用，教員研修の一体化は，教員に求められる資質を養成及び維持する上からも重要であり，教員養成大学，教育行政機関，学校現場の連携協力の強化の必要性は益々高まっている。中央教育審議会の答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」（2006年７月11日）において，教員として必要な資質能力を確実に身に付けさせるために，教職課程全体を通じたきめ細かな指

[1] 琉琉球大学教職センター ; Center for Professional Developmental of Teachers, University of the Ryukyus
[2] 琉球大学大学院教育学研究科　教育実践講座・高度教職実践専攻; Department and Professional School for Teacher Education, Graduate School of Education, University of the Ryukyus

導・助言・援助が行えるよう「教職指導」の充実が求められた。主な答申の内容として，次の(ア)～(ウ)の通り示している。

(ア) 学生が教職指導についての理解を深め，教職への適性について考察するとともに，各教科の履修等を通じて，主体的に教員として必要な資質能力を統合・形成していくことができるよう，教職課程の全期間を通じて，継続的・計画的に指導・助言・援助を行うこと。

(イ) 学生が教職課程の履修を円滑に行うことができるよう，入学時のガイダンスを工夫するとともに，履修期間中のアドバイス機能を充実すること。

(ウ) インターンシップなど学校現場を体験させる機会や学校外における子どもとの触れ合いの機会，現職教員との意見交換の機会等積極的に提供すること。

ところで，琉球大学（以下，本学と記す。）は，人文社会学部，国際地域創造学部，教育学部，理学部，医学部，工学部，農学部の７学部を有する総合大学である。2006年当時，教育学部以外に中学，高校の教員免許状の取得を目指す学生は，各学年約200名在籍している状況にあった。しかしながら，教育学部外の学部で教員免許状を取得する学生に対する教授法，生徒指導，学級経営，学校と地域連携等の指導が十分でないため，教育実習校で学生の質が度々問題として言われ続けてきた。

以上のことを踏まえて，本学においては教職課程のカリキュラムの見直しを図った。教員免許状の取得を目指す学生に対して，１年次から４年次までの指導の継続性を重視し，上記の(ア)～(ウ)の内容を各学年に計画的に網羅し，学生の指導実践力やコミュニケーション能力の育成が図れるよう「教職指導（１年次前期)」，「学校教育実践研究Ⅰ（３年次後期)」，「学校教育実践研究Ⅱ（４年次前期)」を計画的・系統的・継続的に履修させるために必修科目として設置した。

2007年度入学生から新たなカリキュラムで教員養成が図られ，今日に至っている。本稿の目的は，2007年の導入から2019年の新教職課程導入までの13年間に，大学の教員養成が当初の意図した計画通り実施されたのか，または学生の質が十分保障されたのかについて，検証することである。

本稿では，「本学の教員養成課程の検証Ⅰ」として報告することで，これまでの取組について検証を行い，今後の教員養成カリキュラムの充実に寄与することを目的としている。なお，今後，「本学の教員養成課程の検証Ⅱ」に関する報告も作成する。

２．「教職指導」について

⑴ 目的

教員の基本的な資質としての教科指導能力は，大学の教職科目を履修することで養成することが重要である。また，「総合的な学習の時間」及びホームルーム活動，生徒会活動，学校行事などの特別活動，部活動における教員の指導役割も大切な使命の一つである。したがって，これらの内容の理解及び指導力に対する意識の高揚を図るため，大学初年度から本科目を履修させることで，教員としての資質を養成するため教員免許取得を目指す学生に対して，必修科目として設定している。

⑵ 講義内容

「教職指導」の主な講義内容は，次の①～⑤の通りである。

① 教師の役割・使命感について理解する。

② 今日的教育課題をテーマとしたグループ討議・発表を行うことでコミュニケーション能力の育成を図る。

③ 部活動の意義・課題について理解する。

④ 一日職場体験を実施することで，学校の実態を理解し，教職について真剣に考える機会を図る。

⑤ 職場体験報告会を実施することで学校現場の現状，課題を共有する。

⑶　職場体験

【実施内容】

①　平成30年度「教職指導」１日職場体験プログラム（琉球大学教職センター）

「教職指導」１日職場体験プログラムの派遣校等は表１の通りである。

表１　１日職場体験割り当て表

クラス	１組	２組	３組	４組	５組	６組
派遣校	球陽高校（15名）	陽明高校（14名）	普天間中学校（14名）	首里高校（14名）	西原高校（15名）	那覇高校（14名）
	中部農林高校（14名）	浦添高校（14名）	真志喜中学校（14名）	知念高校（13名）	浦添工業高校（14名）	那覇商業高校（14名）
講　義担当名	A	B	C	D	E	F

※各クラスとも，職場体験校の派遣人数は各学校約20名以下とする。
※派遣校については調整済（内諾済）

②　日程

・実施日：平成30年９月10日（月）　※予備日９月11日（火）
・時　間：８：30～17：00
・集　合：学生は現地集合，現地解散とする。(AM８：00までに各学校の正門前に集合，８：15出席点呼)
・引　率：各クラス担当教員が行う(但し,出席点呼のみ琉球大学教員養成運営委員に一部依頼する)
・その他：１日職場体験プログラムの実施校におけるスケジュールは表２の通りである。

表２　職場体験スケジュール表：参考例

No	校時	実　習　内　容
1	職　朝	職場体験受講学生の代表あいさつ ・学生を各ホームルームに配属する（各クラス１～３名程度）
2	ＳＨＲ	各ホームルームにて自己紹介
3	１校時	校長訓話（学校経営方針・教師像・学生に望むこと等）
4	２校時	学校教育活動の説明（学校行事，進路指導，生徒指導，部活指導等）
5	３校時	授業参観（各クラスに１～３名程度配置）※割当のＨＲの授業参観
6	４校時	授業参観（各クラスに１～３名程度配置）※専門教科の授業参観
7	昼　食	
8	５校時	先輩教師の講話，質疑応答（できれば，初任研対象教師，中堅教師の２名） ・教師になった動機 ・採用試験までの道のり ・教師としての苦労や喜びなど
9	６校時	まとめ（控え室にて，各自本日の行動の記録・感想など記録紙に記入）
10	ＳＨＲ	各クラスへ
11	清　掃	生徒と一緒に参加すること
12	交　流	在校生との懇親，または部活動見学（PM５：00まで）解散

注１）No.３の校長訓話については，校長の都合の悪い場合は，副校長または教頭での対応もあり。
注２）No.４～７については，学校の実情によって，順序または内容変更もあり。
注３）No.５，６の授業参観および授業補助は，導入から展開，まとめまで50分間の授業の流れをしっかり観察することになるので，クラスへの学生の配置をお願いする。
なお，学生に授業サポートをお願いすることも可能である。
注４）中部農林・浦添工業高校に於いては，３校時終了後に昼食となる。

⑷　職場体験を終えての学生の感想（学生の感想から一部抜粋）

「１日職場体験プログラム」を終了後，学生の感想の一部を紹介する。なお，文章は学生の書いた文章をそのまま記載した。

・大学の座学だけでは学ぶことができない学校現場での実習は，私にとって非常に貴重な時間だった。Ａ高校の歴史をはじめ，一般高校のお話も聞くことができ，実践的な現場で働く教師を見て良い刺激になった。特に授業観察では，漢文とコミュ英を拝見し，先生のアプローチの仕方や授業の進め方，プリント作成の方法，巡回指導など身近にみることができ，また生徒の様子やクラス掲示物，席の配置など数多くの収穫があった。今後，教師を目指していく私たちにとって，さらに夢が膨らみ一層気合が入った。

・職場体験の事前学習を通して，教職にまつわる様々な基礎的な知識が学べた。そして，いざ臨んだ職場体験では教職の厳しさよりも楽しさを学ぶことができた。曖昧な気持ちで取った教職の授業であったが，今回の体験を通してより一層教職への興味が増した。

・客観的に見ることにより，いつもの生徒側だったら気付かなかったが生徒の一つ一つの行動で「先生はこんな気持ちになっているのではないか？」と考えることができた。資料作り，授業の進め方，声の出し方などを見ていて，自分の専門分野以外にも学ばなければいけないことがたくさんあることを発見できた。

・今回の職場体験を通して，なんとなく免許を取りたいと思っていた気持ちが，先生になりたいという気持ちに少し近づいた。学校の雰囲気によって変わると思うが，生徒が先生と楽しく会話をする様子やクラスの生徒が先生のことを気に入っている様子がとてもいいなと思う。授業準備やＳＨＲ等，ばたばたしていて大変そうだとは思うが，そういうことも含めてやりがいのある仕事だということを学んだ。まだ，自分に先生としての適性があるかどうか分からないけど，先生という職業がもっと好きになったし，これから，先生になるために，勉強はもちろん，色々な経験をしてネタの多い先生になろうと思える良い機会となった。

・１年次の時から，学校現場に触れることができたことは，今後，教職に関する講義にも大いに役立つと思うので良い経験となった。

・実際に現場を観察してみて，生徒目線ではわかりづらい「授業の工夫」や苦労も多くあることを知った。現場の教師だから分かる学校現場の厳しさや楽しさを聞くことができ，良い経験となった。また，教師の授業以外の仕事も垣間見ることができる良い機会であり，教職について座学では実感しづらかった部分も学ぶことができた。

・今まで，生徒の立場で受けているだけだった高校の授業を，教師だったらという立場で見学することができた。講義で学んだ知識を実際の教育現場を通して確認することができた。

・学校現場を教員というこれまでとは違った視点でみることで，今まで気づかなかったことやわかったことが多くありました。先生の授業での話し方や目線の位置などもこれからに活かすことができそうだと思いました。現場にいくことでモチベーションが上がったのを実感しています。

・現在の学校現場を自分が通っていた高校と比べながら見学することでその違いは何なのかを考えることができた。先輩教師の話から，今やるべきことを聞くことができ，今後の目標設定において大きな材料になった。生徒とコミュニケーションを取る上で，教師によってそのやり方が違い，自分がこれからどうやっていくかの参考になった。

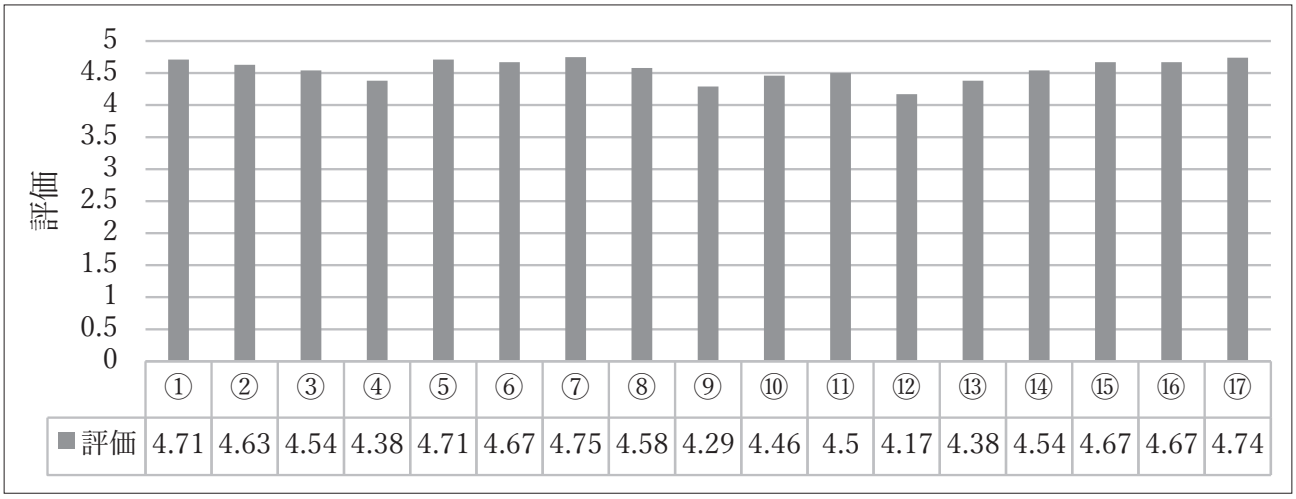
・教師に必要な資質とは何かを学べた。漫然と勉強を教える事が教師という感じがしていたのが，教師も生徒と同じ目線で向き合うべきだ！と明確に思うようになった。

⑸　学生授業評価アンケート結果（図１）

授業終了後，クラスの受講者20名に対して「学生授業評価アンケート調査」を実施した。質問項目は，

次の①～⑰であった。また，評価の選択肢は，「１．全くそう思わない」，「２．そう思わない」，「３．どちらともいえない」，「４．そう思う」，「５．強くそう思う」の５件法であった。なお，結果は図１の通りである。

① シラバスに記載された目的や趣旨が活かされた授業であった。
② 使用した教材は適切であった。
③ 教員の説明はわかりやすかった。
④ 理解を促すための方法上の工夫がよくされていた。
⑤ 総合的に判断してこの授業に満足している。
⑥ 教師という職業，また教育現場の現状や課題が良く理解できた。
⑦ 将来教員になった時に活かされる内容であった。
⑧ 教職を目指すことを真剣に考える事ができる授業であった。
⑨ 講義全体を通して，意欲をかきたてる講義内容であった。
⑩ 講義全体を通して十分に理解できる内容であった。
⑪ 課題（レポート）の提出が適当であった。
⑫ 教職に対する法体系が理解できた。
⑬ 班討議等は，コミュニケーション能力の向上に役立った。
⑭ 班討議等は，教職を理解する上で有意義であった。
⑮ 他学部学生との交流のきっかけとなった。
⑯ 中・高校での職場体験は教職を考える上で有意義であった。
⑰ 職場体験後の発表会は，体験で得たものをまとめ整理する上で有意義であった。



	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰
■評価	4.71	4.63	4.54	4.38	4.71	4.67	4.75	4.58	4.29	4.46	4.5	4.17	4.38	4.54	4.67	4.67	4.74

図１　平成30年度学生授業評価

さらに，「この授業で特に良かった点，また印象に残った点」に，自由記述してもらった。

回答として，①「先生の話が面白かった」，②「エピソードがおもしろかった」，③「先生の実体験が聞けて良かった」，④「先生のお話もたのしく，講義の内容も充実していた」等の記載があった。

「授業で改善すべき点（設備･備品等を含む)」として，①「特にない」，②「レポートがしんどかった」等の記述があった。

３．「学校教育実践研究Ⅰ」について

⑴　目的

本科目は，教育法規の理解，学習指導案作成や模擬授業を中心とした教科指導や教科外指導，学級経営，子ども理解及び生徒指導等について，理論と実践の融合を目指し「教育実習生としての視点」を共通のコンセプトとして，学びを深化させ，かつ演習を充実させることを目的とする。

なお，本科目は，2007年度から「学校教育実践研究」として設置されたが，2009年度後学期より３年次で「学校教育実践研究Ⅰ」と2010年度前学期より４年次で「学校教育実践研究Ⅱ」として学ぶことで，教員としての力量を高めることを考慮した。

⑵　講義内容

「学校教育実践研究Ⅰ」の主な講義内容は，次の①～⑤の通りである。

学習指導案の作成及び模擬授業，並びに授業研究会を中心に据えて講義を設定した。

①　学習指導案は細案（Ａ４版４～６枚程度）を各自作成する。

②　模擬授業は一人25分とし，全員実施する。模擬授業に当たって，模擬授業者以外の学生は各自で「模擬授業評価シート」に評価等を記入する。

③　模擬授業実施後の授業研究会は，４グループに分かれ授業内容を意見交換後，各グループごとに話し合った内容を発表する。

④　担当講師による講評を行う。

⑤　「模擬授業評価シート」は模擬授業者にフィードバックのため提出する。

⑶　学生授業評価アンケート結果（図２）

授業終了後，クラスの受講者26名に対して「学生授業評価アンケート調査」を実施した。質問項目は，次の①～⑮であった。また，評価の選択肢は，「１．全くそう思わない」，「２．そう思わない」，「３．どちらともいえない」，「４．そう思う」，「５．強くそう思う」の５件法であった。なお，結果は図２の通りである。

①　シラバスに記載された目的や趣旨が活かされた授業であった。

②　使用した教材は適切であった。

③　教員の説明はわかりやすかった。

④　理解を促すための方法上の工夫がよくされていた。

⑤　総合的に判断してこの授業に満足している。

⑥　７月にこの講義のガイダンスを実施したことは良かった。

⑦　７月のガイダンスにおける教育講演会は良かった。

⑧　授業の指導計画や評価計画等に関する講義は良かった。

⑨　学習指導案の書き方の指導は適切であった。

⑩　模擬授業を全員に課したことは良かった。

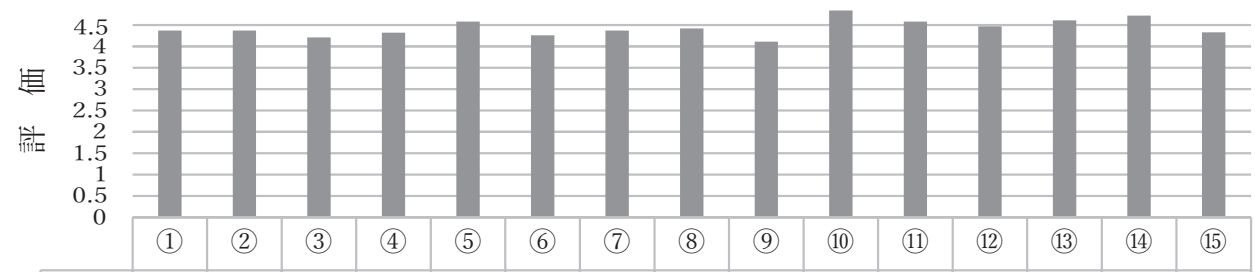
⑪　模擬授業の一人あたりの時間は適切であった。

⑫　模擬授業における反省会（授業研究会）や講師の指導・助言等は有益であった。

⑬　授業全体を通して，意欲的に取り組める授業内容であった。

⑭　教育実習における授業実践につながる内容であった。

⑮　教育現場の現状や課題が理解できる内容であった。



	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
■評価	4.37	4.37	4.21	4.32	4.58	4.26	4.37	4.42	4.11	4.84	4.58	4.47	4.61	4.72	4.33

図２　平成30年度学生授業評価

⑷「学校教育実践研究Ⅰ」を終えての学生の感想（学生の感想から一部抜粋）

最後の講義において，学生に「学習指導案作成にあたって」「模擬授業を実施して」「模擬授業後の授業研究会」の３つの視点を通して感じたことを400～500字以内にまとめさせた。その一部をこの欄に記載することで本講座が有益であったかなかったかの判断材料としたい。

【受講生Ａ】

私は，この授業で初めて学習指導案を作成し模擬授業を行いました。学習指導案作成をして授業の時間配分，板書計画等１回の授業を行うまでに教師はこんなに考えていることを知ることができました。実際に作成した学習指導案を使って模擬授業をしてみて，頭で思い描いている授業を行う難しさを痛感しました。この説明で生徒がわかるだろうと考えていたものが，反応をみてみるとあまり理解していない箇所がありました。生徒の力量を勝手に決めるのではなく，目の前の生徒に合わせた授業をつくっていくことの大切さを学びました。また,他の人の模擬授業をみて吸収できることがたくさんありました。生徒との距離の縮め方，興味を引くポイント等とても参考になりました。授業研究会では，私と異なる視点からの見方を発見でき有意義なものでした。ちなみに私は化学専攻で他の科の授業から得られるものはあるのか授業の始まる前は思っていました。しかし，終えてみると全ての授業から参考になる部分があり，まねするところはどんどんまねして学校実践研究Ⅱにつなげたいと思います。

【受講生Ｂ】

今回授業を通して将来教師になる為に必要な知識や子ども達との関わり方等多くの学びを学習できた。その中で学習指導案作成,模擬授業,それを通しての授業研究会を行ってみて教師へのステップアップにつながった。まず，学習指導案作成の時を振り返ってみると指導案の骨組，板書計画の大切さを学ぶことができた。指導案作りは見本を見ながら丁寧に仕上げるように心掛けた。作成してみて感じたことは，教材観，指導観，生徒観を考えることが難しかった。生徒の実態を想像しながらどのように授業を展開していくか考察した。次に模擬授業を振り返って,人の前に立つことに慣れていない為緊張もあった。これもこれから慣れていく必要を感じた。後，教材準備の難しさもあった。教育実習先では入念に準備していきたい。視覚的な教材や聴覚的な教材を工夫して取り入れる事によってより濃い授業を創ることができると感じた。最後に授業研究会をすることによって違った見方や考え方があることを学ぶことができるよい機会になった。自分では気づかない面を指摘されることで今後の学びに多く活かされると感じた。

【受講生Ｃ】

学習指導案を作成するのが初めてだったので，ネットで調べたり，図書館から本を探して作成しました。一から自分で作ってみると，想像をはるかに超える大変さで，授業を作ることの難しさを実感しました。実際に模擬授業をやってみると，本当に授業は生き物だと感じました。自分のイメージしていた

スピード通りにはいかず，いかに臨機応変に対応するかが重要だと思いました。また，元々教員志望でしたが，実際に一から自分で授業を作って，大変な仕事ではあるが教員になりたいという思いが強くなりました。模擬授業後の授業研究会でも，自分では思いつかなかった改善案を提案してもらったりと，とても良い機会でした。また，このクラスが英語，理科，商業，農業，数学と教科がバラバラであったため，より新鮮な意見が聞けたのではないかと思いました。ただ，授業研究会での様々なアドバイスをもらう中で，専門用語が多く，苦手とする生徒が多い理科は，さらなる工夫が求められると感じました。他の教科の授業を受け，様々な方面から刺激をもらえた良い授業でした。

４．考察とまとめ

はじめに「教職指導」について考察する。この科目を１年前期に設定した主な理由として，早期から「学生本人が教師に向いているかどうか」をこの講義を通して真剣に考えてほしいとの願いからである。そのことから，教師の適性，教師の役割や使命感，悩み，実際の現場の観察など多様な内容を網羅した講義内容になっている。特に学校現場での一日体験はこの講義のメインである。15コマの講義を通して，学生自身が教職に対する意識が大きく変化したことが学生らの記録簿から読み取れる。この講義を通して，教職に真剣に向き合う姿勢が成就されているように思われる。

評価は，質問項目の平均が4.55（SD±0.16）であった。質問項目の⑦「将来教員になった時に活かされる内容であった」が4.75，⑰「職場体験後の発表会は，体験で得たものをまとめ整理する上で有意義であった」4.74，①「シラバスに記載された目的や趣旨が活かされた授業であった」と⑤「総合的に判断してこの授業に満足している」4.71，となっていた。一方で，質問項目の⑫「教職に対する法体系が理解できた」は4.17，⑨「講義全体を通して，意欲をかきたてる講義内容であった」4.29が，質問項目の中で低い評価となっていた。

このことから，教育基本法や学校教育法等の教育関連法に関する説明及び教職の魅力ややりがい等について，キャリア教育の視点から，どのような工夫改善を図っていくのかが課題であると考えられる。次に，「学校教育実践研究Ⅰ」について考察する。この講義は，学習指導案の作成，模擬授業，模擬授業後の授業研究会が主な内容である。授業評価アンケートから以下のことが読み取れる。

評価は，質問項目の平均が4.44（SD±0.19）であった。質問項目の⑩「模擬授業を全員に課したことは良かった」は4.84，⑭「教育実習における授業実践につながる内容であった」4.72，⑬「授業全体を通して，意欲的に取り組める授業内容であった」4.61，一定の評価を得たものと考えられる。質問項目の⑤「総合的に判断してこの授業に満足している」は4.58であり，教員を目指して日ごろから真剣に取り組んできた学生にとって，この講義は有意義であったことが伺える。一方で，質問項目の⑨「学習指導案の書き方の指導は適切であった」は4.11，③「教員の説明はわかりやすかった」4.21，④「理解を促すための方法上の工夫がよくされていた」4.32で，評価が若干低くなっていた。

「学習指導案の書き方」は教科教育法等において，既習済みである。しかしながら，十分な理解のないまま，この講義を受講する学生が少なからず存在する。４年次前期の「学校教育実践研究Ⅱ」において，再度「模擬授業」及び「学習指導案の作成」を実施するため，学生は自信をもって教育実習に臨めるものと捉えている。「学習指導案」の作成及び「模擬授業」の時間確保が課題となっている。

以上から，「教職指導」「学校教育実践研究Ⅰ」は４年次の「学校教育実践研究Ⅱ」及び教育実習に繋がる重要な位置づけと捉えることができる。今後，「学校教育実践研究Ⅱ」の授業評価アンケート及び教育実習等に関するアンケート結果を分析並びに考察することで，本来の目的に叶った講義構築になっているか検証したい。

下地と城間（2010）は，琉球大学教員養成について，従来，教科指導を教育学部が中心となり，各学部の教員の教育連携のもとに実施されてきたが，「教育学部以外の学生に対する教育実習の事前指導な

ど学校教育に実践的な指導が必ずしも十分なものとはいえなかった」，と述べている。また，「実習生配置校の教育現場からは，学習指導案の書き方や教科指導法，教育実習に臨む態度等について多くの課題が大学に寄せられていた」と指摘している。

従って，教職科目は一学部の視点で捉えるのではなく，全学的視野にたって企画運営していくことが必須である。そのためにも，教職関連科目を有機的でかつ総合的に融合させるため，科目内容の一層の創意工夫や連携強化を図るため，教育学部と他学部との連携協力がこれまで以上に重要となっているものと考える。

なお，教育職員免許法及び同法施行規則改正（2019年４月１日）の施行に伴い，履修内容を充実した教職課程が展開されている。「学校教育実践研究Ⅰ」は「学校教育実践指導Ⅰ」へ科目名を変えたが，従来通り必修科目として実施している。一方，必修科目で実施していた「教職指導」は，2021年度より選択科目となる。

模擬授業の様子

授業研究会の様子

引用文献

文部科学省，2006，「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」，（2020年７月21日取得，https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/attach/1336998.htm）.

琉球大学教育学部附属教育実践総合センター，2008，『教職キャリアをゲットする』明治図書出版.

下地敏洋・城間盛市，2010，教職指導と学校教育実践研究の概要，琉球大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，17，27-39.